

宮澤賢治と日蓮聖人

遠 藤 均

星槎道都大学研究紀要

経営学部

創刊号

2020年

宮澤賢治と日蓮聖人

遠藤 均

【序文】

2021年2月16日は、日蓮聖人が降誕してから、ちょうど800年にあたる記念日である。

日蓮宗の九州教区では、これを慶讃する100年に一度の大会が、2018年11月28日(水)、福岡サンパレスホールで盛大に開催された。来場した2300名は、九州地区はもとより、国内外からの来賓や檀家等である。

第一部は、主として、粛々と法要がとりおこなわれた。

第二部では、朗読パフォーマンスの第一人者のひとり、女優の紺野美沙子さんが、ピアニスト・中村由利子さんの伴奏をともない、『宮澤賢治と日蓮聖人』の朗読などをおこない、大成功を収める。

このとき私は、朗読の原作者として、前日のリハーサルに立ち会い、当日の本番にも臨席させていただいた。

翌年の2019年4月26日(金)には、福岡県にある日蓮聖人銅像護持教会(身延山福岡別院)にて、借越ながら、今回は私が、世界的なチェリスト・吉川よしひろさんの伴奏とともに、朗読させていただく。そして、400人の聴衆から、身に余る万雷の拍手をいただくことができた。

本稿では、そのときの朗読原稿を大幅に書き改め、詳しい註を書き加えている。

私の母方の祖父と叔父は曹洞宗の住職であった。

が、私自身は、特定の宗教には属さず、仏教であれ、キリスト教であれ、あらゆる宗教を「哲学」という視座から研究対象としている。

とりわけ仏教は、宗派を問わず、長年、学びつづけてきた。あわせて、仏教を童話で表現しようとした宮澤賢治についても、研究を重ねている。

ところで、その朗読原稿を執筆することになった経緯は、主に二つあった。

一つには、私がパーソナリティーを務めるFMメイブルの番組『風の風景』(79.9MHz、毎週土曜日12~14時、2014年~現在)や『道新文化センター』で、折に触れ、宮

澤賢治や仏教について語ってきたこと。

もう一つは、チェリスト・吉川よしひろさんとのご縁である。

吉川さんは、北海道ツアーのさい、毎年、『風の風景』に出演してくれ、たびたび宮澤賢治について熱く語りあってきた。

彼は、本学とも縁があり、大講堂で、2014年7月20日(日)、法人設立50周年記念行事として、素晴らしいチェロを奏でてくれている。

また、私のゼミにおいても、講演会&チェロ演奏会を開催してくださったことは、感謝に堪えない。

【本文】

みなさん、日蓮聖人が降誕されて八百年にあたる聖日は、いつかご存知ですか。

2021年2月16日です。

ここでは、その100年前の、日蓮聖人降誕七百年のちょうどその日に、時計の針を戻してみましよう。

当時、岩手県の新聞社、『岩手日報』に、こんな記事が載りました。

燃ゆる信仰から精進の一路へ
高農を優等で卒業した宮澤賢治君
聖日蓮生誕七百年の恩ひ出深き日に
剃髪して深夜漂然家出す(01)(註01)

※これをスクリーンに映し出す。

岩手県の新聞・『岩手日報』によりますと、2021年2月16日の日蓮聖人降誕八百年の聖日から遡ること100年。

日蓮聖人生誕700年にあたるちょうどその日に、『雨ニモマケズ』で有名な25歳の宮澤賢治は、髪を剃って家出をしたというのです。

なぜ、宮澤賢治は、家出をしたと思われますか。

賢治は、法華経をはじめ読んでるとき、あまりの感動

で、身体^{からだ}の震えが止まらなくなりましたといえます。(註02)

そして、法華經と日蓮聖人が唱えられたお題目(※南無妙法蓮華經)の修行こそ、人々を救う本当の道であると確信したのです。(註03)

賢治は、家出の一年ほど前の24歳のとき、日蓮の法華經を信仰する「国柱会」(註04)に入会しました。

その頃、家では、家業^{かぎょう}の質屋・古着屋を手伝うかたわら、浄土真宗(※南無阿彌陀仏)を熱心に信仰する父親に激しく改宗を迫り、父親と激しい宗教論争を交わっていたのです。(註05)

賢治は、ひどく思いつめていました。

父親が、法華經や日蓮聖人を信仰してくれないのは、自分の修行が足りないからにちがいない。それならば、法華經や日蓮聖人を信仰する国柱会の東京本部(※上野鶯谷)に行き、しっかり修行を積むしかない、と。

けれども、なかなか意を決することができません。

そんな折、賢治が店の火鉢にあたっていたときのことです。

驚くべきことが起きました。

なにが起きたと思われませんか。

なんと、賢治の背中に、日蓮聖人のご本が二冊、棚からどかっと落ちてきたのです。

その瞬間、日蓮聖人から背中を押されたと感じたのでしょう。

賢治はすぐさま、棚から落ちた日蓮聖人の御書などを風呂敷に包みこむと、鉄砲玉のように家を飛び出してきました。そして、岩手県の花巻駅から上野行きの汽車に乗ったのです。

家出同然で上京した賢治でしたが、国柱会の理事(※高知尾智耀)から、その後の人生を決定づける貴重なアドバイスを受けることができました。

文学が得意なら、その文学の上に法華經の信仰がにじみ出るような作品を作ってみてはどうか、と。(註06)

この言葉に深く共感した賢治は、東京本郷にある下宿からほど近い印刷会社(※文信社)でガリ版切りのアルバイトをしながら、ひたすら童話を書きつけました。

ひと月に3千枚も書いたときなどは、「原稿のなかから一字一字とび出して来て」(註07)、賢治にお辞儀をしたといえます。(註07)

上京から7か月がたった頃でした。

賢治のもとに、衝撃的な知らせが届きます。

賢治の二つ年下の妹・トシが病に倒れたというのです。

妹・トシは、家族のなかで、たったひとり、賢治と法

華經信仰を共にしていました。

驚いた賢治は、大きな茶色のトランクに書きためた原稿を詰めこみ、花巻に飛んで帰ります。

妹・トシの病気は、当時、不治の病とされていた肺結核でした。

それでも賢治は、妹の快復を願い、献身的な看病をつづけたのです。

しかし、帰郷から1年3か月後。冷たい雨雪の降る日、愛する妹は、24歳という短い生涯を閉じます。

最愛の妹を失った賢治は、押入れに首をつっこんで、声のかぎり泣くことしかできませんでした。

お釈迦様が、八つの苦しみのひとつとされた「愛する人と離別する苦しみ」。それは、だれもが避けて通れない、「人生の大きな試練」です。(註08)

みなさん、『法華經』に「常懷悲感心遂醒悟」という言葉がありますが、その意味をご存知ですか。

深い悲しみを胸の奥深く秘めていると、その悲しみに心が洗われ、ついには悟りにいたる、というのです。

愛する人を失う悲しみは、とても辛いことですね。

でも、それさえも正しく受け止めれば、私たちはだれでも、仏さまのような優しく温かい心を育むことができるのです。

宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』にも、こんなセリフがあります。

「なにがしあわせかわからないです。ほんとうにどんなつらいことでもそれがただしいみちを進む中でのごとなら峠の上りも下りもみんなほんとうの幸福に近づく一あしずつですから」(註09)

「ただいちばんのさいわいに至るためにいろいろのかなしみもみんなおぼしめしです」(註10)

では、悲しみに大いなる価値があり、しかも思し召しでもあるとするなら、どうでしょう？

いちばんの問題は、「何が起きたか」という出来事そのものではなくりますね。

その出来事を、「自分自身がどう受け止め、どう生きていくのか」、ということこそが、いちばんの問題となるのではないのでしょうか。(註11)

宮沢賢治に話をもどしましょう。

妹・トシを亡くしてからおよそ4年後。

農学校の教師をやめ、農民への献身の道を選びます。

賢治は、農民のために新しい農村建設を目ざす「羅須地人協会」という農民塾を開きました。

また、自分を勘定にいれず、豪雨や冷害に苦しむ農家のために、田んぼの稲を心配し、夜も眠らずおろおろ走り回る日々を送っていました。

無理に無理を重ね、しかも粗食ときては、身体が衰弱しないはずはありません。

昭和3年8月、賢治は肋膜炎で倒れ、病の床についてしまいます。

それでも賢治は、病床で詩を書きつづけました。

病気が快方に向かっていた昭和5年4月のことです。

病床に、砕石工場の工場長（※鈴木東蔵）が訪ねてきます。(註10)

賢治は、その人柄に強く魅かれ、経営に苦しむこの人のために、どうしても力になってあげたくなりました。

翌、昭和6年、賢治は、東北砕石工場技師 嘱託となります。

けれども、技師のみならず、広報やセールスマンとしても、文字どおり命を削るような多忙な日々を送ることになりました。

同年9月のこと。賢治は、家族の反対を押し切り、壁材料の宣伝のため、大きなトラックに40キロもの煉瓦見本を詰めこみ、出張に出かけていきます。

やはり、無理がたたったのでしょうか。夜行列車のなかで寒風にさらされたために、上野駅に到着した直後、発熱。しかも、風邪から肋膜炎を併発してしまいます。

そして、旅先の東京で、とうとう病に倒れてしまいました。

賢治は、そのとき死を覚悟したのでしょうか。両親宛に、こんな遺書をしたためます。(註10)

「この一生の間どこのどんな子供も受けないやうな厚いご恩をいたゞきながら、…たうたうこんなことになりました。今生で万分一もついに返しできませんでしたがご恩はきっと次の生又その次の生でご報じたいとそれのみを念願いたします。

どうかご信仰といふのではなくてもお題目で私をお呼びください。そのお題目で絶えずおわび申しあげお答へいたします。

九月廿一日
賢治

父上様

母上様」(04・05)

賢治は、ご恩返しができないまま命が尽きるであろうことを両親に深くわびます。

けれども、賢治は確信していました。

命はこの世かぎりのものではない、と。

だから、なんども生まれ変わって、ご恩返しをいたします。どうかお題目で私をお呼びください。そう書いたのです。

幸い、このときは、なんとか一命をとりとめたものの、それ以降、病の床に臥してしまいます。

そして、この年（※昭和6年）の11月3日、病床で、愛用の黒い手帳に『雨二モマケズ』を書きとめました。

翌、昭和7年、病床にあっても、砕石工場や肥料設計の相談にのりだします。

そして、昭和8年の夏の終わりごろ。呼吸が苦しくなり、急性肺炎を発症してしまいます。

このとき、人生の終わりをはっきりと自覚したのでしょう。

夕方に、賢治と父・政次郎は、腹を割って、たがいの信仰について、そして親鸞聖人と日蓮聖人の臨終について語り合いました。

当日の夜7時頃、農家の人が肥料の相談に来ます。

すると賢治は、わが身を省みず、病をおして、1時間もの間、親身になって話をしました。そのため、ひどく疲労困憊してしまいます。

その翌日（※21日）の昼近く。いよいよ賢治の命の炎が、燃え尽きようとしていたときのことで。

賢治が寝ている二階から、突然、「南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経」と唱える声がするではありませんか。

驚いた家族は、すぐさま階段を駆けのぼります。

すると、賢治は咯血し、顔が青ざめながらも、お題目を唱えているではありませんか。

そのとき政次郎は、「遺言することはないか」と問うたところ、賢治は、最期の願いを父に託しました。(註12)

どうか、法華経を千部づくり、私の言葉をそえて、知りあいの方に配ってください、と。

父親は、愛する息子の最期の願いを受け止め、「お前も大した偉いものだ」(04)と褒めたたえます。

すると賢治は、「おれもとうとうお父さんにほめられた」(04)と言って、嬉しそうに微笑みました。

そのあと、水をすこし飲み、みずから脱脂綿で身体をふいていたときのことで。急に意識を失い、二度と意

識が戻りませんでした（※昭和8年9月21日午後1時30分）。

こうして宮澤賢治は、家族に見守られながら、37年間の生涯に幕を下ろしたのです。

賢治がなくなった翌年のこと。偶然、あの大きな茶色いトランクの蓋の裏から一冊の手帳が見つかりました。

みなさん、その手帳のなかには、なにが書かれていたと思いますか。

『雨ニモマケズ』の詩が走り書きされていたのです。

それでは、最後に『雨ニモマケズ』をおききください。

雨ニモマケズ
風ニモマケズ
雪ニモ夏ノ暑サニモマケズ
丈夫ナカラダヲモチ
慾ハナク
決シテ臆ラズ
イツモシヅカニワラッテキル
一日ニ玄米四合ト
味噌ト少シノ野菜ヲタベ
アラユルコトヲ
ジブンヲカンジョウニ入レズニ
ヨクミキキシワカリ
ソシテワスレズ
野原ノ松ノ林ノ蔭ノ
小サナ萱ヅキノ小屋ニキテ
東ニ病氣ノコドモアレバ
行ッテ看病シテヤリ
西ニツカレタ母アレバ
行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ
南ニ死ニサウナ人アレバ
行ッテコハガラナクテモイ、トイヒ
北ニケンクワヤソショウガアレバ
ツマラナイカラヤメロトイヒ
ヒドリノトキハナミダヲナガシ
サムサノナツハオロオロアルキ
ミンナニデクノポートヨバレ
ホメラレモセズ
クニモサレズ
サウイフモノニ
ワタシハナリタイ (註13)(06)

註

(註01) 新聞報道とは異なり、実際に賢治が家出をしたのは、同年1月23日のことである。午後5時12分花巻発の列車で東京に向かった。(07)

『岩手日報』の当時の記事は、資料的価値が高いので、4行の見出し後の本文を、旧字体のまま以下に記載したい。

ただし、『岩手日報』から取り寄せていただいた縮小コピーされた記事を見ると、活版印刷の活字が摩耗し、不明瞭であるものが多々ある。とりわけ、ふり仮名は、判別しづらいものが多いため、すべて割愛させていただいた。

花巻川口町に於ける素封家（※金持ち）宮澤家の息宮澤賢治（二五）君は大正七年盛岡高等農林學校農學科を優等で卒業した秀才だが、遂四五日前の深夜漂然と家出し爾來行衛不明なので全町では此頃の話題として種々な取沙汰してゐる

× × ×
× × ×

全君は小學校から懸立盛岡中學校、更に高農までの學歴でも常に最優等で同級生間に君子人の如く尊敬を拂われたそれに酒も飲まず烟草も喫さず女の話一つも無いと云う石部金吉派に屬する人間だと高農在學當時から同級生間の『變人』として取扱はれてゐた

だが宮澤君にも一つの道樂があつた、道樂と云つて前に述べたやうな八公熊公の亞流ぢやない全君は中學校時代から宗教上の研究に没頭し寢食を忘れて『經文』の誦唱に耽つてゐたそして數年此來聖者日蓮を喝仰して其の信仰日を逐ふて益々熱烈なものがあつた

同君の信仰は現世によくある宗教屋の如き淺薄なものではなかつた、常に灼か如く燃へ爛れるが如き焰の信仰と精進の一路あるのみだつた、そして彼は常に『日蓮主義』の爲めならば身命も何かはと熱狂した口調で友人間に自己の主義を説いて止まなかつたのである

彼はこの數年間の勤行中、精進潔齋魚肉一切を口にせず生臭坊主共の心膽を奪ふ様な大修業、大試鍊によく堪へた

然るに大正九年も暮れ十年を迎へたある日、それは丁度霞の寒に入るや、彼は單衣一枚で深更十二時頃、そつと家を抜け出し『寒行』をやり、吹雪が朔風に氷つて雹となり彼の頬に血を染ませる様な夜も泰然として町外れまで往復してゐたのであつた、寒三十日間、彼は『南無妙法蓮華經』の七字を唱へ乍ら魂

と肉の試練に打勝た

× × ×
× × ×

彼の信仰は日を経るに從ひ益々熱烈になつて來たが、彼は當時俗悪な還境から脱して他郷の聖地に流れゆき其處で日蓮の教へに殉じ度いと思つてゐた、二月半ば過ぎのある、夜、チロくと蛇の眼の様に光る星の下を彼は着のみ着のまま、塗黒の髪をおつぼり剃つて今心姿と化り漂然家を脱け出て姿を晦ました、彼の家出は誰も見た人はないと云ふ扱にも穢れた現世の張を拂つて『法』の爲めに敢然發心した年若き信徒よ…

× × ×
× × ×

全人の家出した日は、たしか二月十六日であつたらしい、其の日は日蓮上人生誕七百年の思ひ出深い日であつたのである、彼はこの忘るべからざる聖者の此の世に生を享けた日を期して聖地見延山に駈けせ參じたものらしいそれとも房州小湊の日蓮生誕…昨日剃つたも今道心、一昨日剃つたも今道心、彼の主義信仰爲めの門出に幸多かれと祝福せざるを得ない

(註 02) 賢治が、法華經(※『漢和対照 妙法蓮華經』島地大等 編集)と出会つたのは、18歳のときだった。もともとは高橋勲太郎が賢治の父・政次郎に贈つたものだが、政次郎はそれを賢治に譲つたのである。

(註 03) 以下の日蓮聖人に関する説明は、本稿の本文から割愛。

聖人は今からおよそ800年前の貞応元年2月16日、現在の千葉県安房郡小湊でお生まれになりました。

みなさん、日蓮聖人は何歳で出家されたかご存知ですか。

みづから進んで、12の年に、同郷の清澄寺に登り、16歳で出家されたのです。

清澄寺では虚空蔵菩薩に「日本第一の智者となしたまへ」と発願されるほど、求道に精進されました。

さらに学問の研鑽を深めるため、31歳まで、京都で学ばれます。

日蓮聖人は、長年の求道の末に、お釈迦様のすべての教えのなかで、『法華經』こそが、真実の教えであり、「一切經の心」とであるという確信にいたるのです。

この確信を得た聖人は、若き日出家した故郷の清澄寺で昇る朝日に向かい、南無妙法蓮華經と唱えられ、立教開宗を宣言されたのでした。

このとき、聖人は、名前を「日月」と「蓮華」から一字ずつとって、「日蓮」と改められます。

みなさん、聖人は、日蓮という名前にどのような想いをこめたとされますか。

闇を照らす日月、泥沼の中にあっても美しい花を咲かせる蓮華。そのように世の中の人々を救うために精進していこう」

そんな決意をこめての命名だったのです。

今日、大地震や大洪水、大型台風といった天変地異が各地で頻発していますね。

日蓮聖人の時代も、大地震や大洪水、飢饉、疫病が相次いでいました。

そして民衆は、同じく、耐えがたい苦しみにあえていたのです。

民衆の苦しみに涙された聖人は、それをご自身の苦しみとして受け止められます。そして、災いの根本原因が、お釈迦様が乱れた世を救うために説き遺された『法華經』の教えを見失つたためであるとみなし、『立正安国論』を書かれました。

聖人は、これを時の権力者に差し出し、行動を改め直すよう迫ります。

ところが、幕府からは何の反応もありませんでした。

そればかりか、書かれた内容が、お題目に対して反感を持つ人々にもれ広がっていったものですから、数々の法難が日蓮聖人を襲うこととなります。

けれども、日蓮聖人は法難に遭うたびに、「法華經の行者」としての自覚を深めていかれました。

しかも、なんとということでしょう！

聖人は、法難を悦びに変えられ、ついには「日本第一の法華經の行者」と自覚されるまでにいたつたのです。

なぜでしょう？

法華經にはこの教えが弘められるとき、必ず迫害が起こるであろうと予言されてきました。それで聖人は、法華經を身でもって読んだと悦びに変えられたのです。

(註 04) 国柱会は、獅子王と称された元日蓮宗僧侶・田中智学(1861~1939)によって創設された在家仏教団体である。純正日蓮主義を掲げ、「立正安国の実現」を目ざす社会運動を展開した。

国柱会という名称は、賢治が心酔した智学が、日蓮の三大請願の一つである「我日本の柱とならん」にちなんで命名したものである。

なお、智学に傾倒した賢治ではあったが、のちに失望し、決別した。

このことは、賢治の文語詩『心相』や『国柱会』

などに刻印されている。

(註05) 賢治の父・政次郎は、東北における浄土真宗信徒のまとめ役として活躍。毎年のように、京都から真宗の名僧や碩学を招いては「花巻仏教会」の講習会を開いていた。賢治も、8歳の頃より、講演者の身の回りの世話をするために参加し、静かに耳を傾けていたという。

ちなみに、会場は、花巻の「大沢温泉山水閣」で開催されていた。(8)

賢治の兄弟姉妹には、2歳下にトシ、5歳下にシゲ、8歳下に清六、11歳下にクニがいた。

二女のシゲは、家庭内での親子の宗教論争は、「私も肉親にとりまして、親子の相剋は、ほんとうに悲しいことでした」(9)と語っている。

(註06) 高智尾智耀は、当時をふり返ってこう話す。

「賢治君は、毎晩講話をききにきていました。そのうちにだんだんせわをやきだして、出席者の案内やあっせんなどをしていました。

そうこうしているうち、二月のある日、ようやくはなしあうことがあって、あなたは将来どういう方面に進みたいかとたずねると、詩歌、文筆でいきたいと思うということでした。

それで、純正日蓮主義の信仰というものは、それぞれ生業を通じて開顕するもので、文筆に従うものは筆をとって本領を発揮する、その中に信仰生活があるので、これまでややもすれば専門の宗教家にならねば信仰を全うしないと思うむきがあったが、そうではない、ということをついたものです。それを賢治君は『法華文学』ということばでうけとめたのでしょう。

それにしても当時の賢治君は一向に天才的な感じはなく、後年あれだけの文筆活動をするとは私も思いません。また賢治君もちっとも文学のことなどはいりません。信仰と親のことばかりです。国柱会では天業民報という新聞を出していたのだから、その編集をやってもらってもよかったのに、そういうけぶり全然ないので、わたくしもわからずじまいでした」(10)

(註07) 賢治の弟・清六によれば、賢治は、小学校3年生の時の担任・八木英三にこう語ったという。

「人間の力には限りがあります。仕事をするのに時間はあります。どうせ間もなく死ぬのだから、早く書きたいものを書いてしまおうと、わたしは思いました。一カ月の間に、三千枚書きました。そして、おしまいになると、原稿のなかから一字一字とび出して来て、わたしにおじぎするので

す」(12)

賢治は、「半年足らずで膨大な量の童話を書いた」が、「誰もが知っている作品の大半は、このときに第一稿が書かれたという」(8)

なお、宮沢賢と童話との最初の出会いは、恩師・八木英三が語る童話に感動したことに始まった。賢治自身も、「自分の童話の源には先生のお話が影響している」(11)と述べている。

(註08) 釈尊が説いた八苦には、四苦とされる生老病死のほかに、つぎの四つがある。合わせて四苦八苦ともいう。

①愛別離苦 (愛する人たちと別離する苦しみ)

②怨憎会苦 (憎む人と出会う苦しみ)

③求不得苦 (求めるのを得られない苦しみ)

④五羅盛苦 (身体と精神の苦しみ)

(註09) 以下の日蓮聖人に関する説明も、本稿の本文から割愛した。

今日は、日蓮聖人が、悲しみに沈む信徒に宛てた手紙のなかから、2通、ご紹介させていただきます。

古くから日蓮聖人に帰依していた信徒に、南条兵衛七郎という領主がいました。

まだ壮年のお歳であったのですが、痛ましくも病に倒れ、この世を去ってしまいます。

最愛の夫を亡くした妻の悲しみはあまりに深く、夫の後を追ってゆこうとしたほどです。

けれど、お腹に子どもを宿していましたので、危うく思いとどまることができました。

産まれた子どもは、父の七郎という名をとって「七郎五郎」と名づけられ、すぐれた若者に育ちます。

それなのに、なんということでしょう。

16歳の若さで、亡くなってしまったのです。

日蓮聖人は、愛する夫ばかりか、息子にも先立たれ、悲しみに暮れるこの女性に、お手紙を書かれました。

「無常は、この世の定めですが、亡くなられたことを聞くだけでも、耐えがたい悲しみです。ましてや、母…の身にとっては、なおさらのことでしょう。悲しさのありさまをご推察いたします」(12)

「亡くなられた七郎五郎殿は、…幼少のころから、賢い父の跡を継いで法華經に深く帰依し、まだ二十歳にもならないのに、南無妙法蓮華經とお題目をお唱えになり、ついに仏になられ、旅立ってゆかれました。法華經の方便品に、『法華經の教えを聞いた

人は、一人として成仏しない者はない』と説かれて
いるのは、まさにこのことです。

お母上、願って頂きたい。母上として、我が亡き
子を恋しくお思いになられるのであれば、南無妙法
蓮華経と唱えて、先に亡くなられた夫の南条殿と、
亡き（七郎）五郎殿と、未来世にかならず一所に生
まれかわるようにと、お願いなさい。

一つの種子（たね）から、同じ一つの種子（たね）
が生まれるのが、因果の道理です。…同じ妙法蓮華
経の信仰を、心のうちに抱くことによって、あなた
も、亡くなられた時は、子どもさんと、同じ妙法蓮
華経の国へ生まれることが出来るのです。そのと
き、親子三人が顔をそろえて見あわせる時を、想像
してご覧なさい。その喜びは、どれほど深いもの
であるか、お思い下さい⁽¹²⁾

およそ1年後、日蓮聖人は、ふたたびこの女性に
思いやり深い手紙を書かれています。

「私自身、もはや長くはこの世にとどまることは
ないでしょう。きっと近いうちに霊山浄土で（七郎）
五郎殿とお会いすることと思います。母であるあな
たより、先にお目にかかったならば、母上がどれほ
どなげき悲しまれていたか、お伝えいたしましょ
う⁽¹²⁾

この手紙を書かれてからおよそ1年後、日蓮聖人
は、波瀾万丈の61年の御生涯を閉じられました。

「この娑婆世界をおいて他に浄土はなく、この苦
しみの世界こそが浄土である。娑婆世界を本来の浄
土の姿にもどそう」

そんな燃える想いで生きられた日蓮聖人。

浄らかなる蓮華のごとく、法華経とお題目のため
に身命を惜まず、苦しむ人びとを救うことにいの
ちを懸けられた日蓮聖人。

その熱い想いと信仰は、日蓮聖人がお生まれに
なって800年がたった現在までも、多くの先師たち
によって脈々と受け継がれ、生きつづけています。

(註10) 碎石工場の工場長・鈴木東蔵が、賢治の元をは
じめて訪れたのは、いつのことであつたろうか。

賢治の弟・清六によれば、「昭和四年の春」。

鈴木東蔵の長男・実によると、「父の記憶では五年
の六、七月頃」。

実の別の著書では、「五年の四月十二日」となっ
ている。

賢治の鈴木宛の五年四月十三日付の手紙には、「昨
日は折角の御来花」とあるので、本稿では、「五年の
四月十二日」説を採用した。⁽⁰⁴⁾

(註11) 肋膜炎はこのときが最初ではない。

一回目は大正7年に発症。一カ月近く療養をして
いた。

そのとき賢治は友人にこう語ったという。

「自分の命もあと15年あるまい」と。実際、賢治
は、その15年後の昭和8年9月21日午後1時30
分に亡くなっている。⁽⁰⁸⁾

この遺書が書かれたのは、亡くなるちょうど2年
前の昭和6年9月21日であるが、没後に発見され
た。

ちなみに、遺書は、宿泊先の「旅館 八幡館」の
便箋と封筒に書かれている。

賢治は同月27日、父親に電話し、重態であること
を告げたと、父の厳命と手配により、翌朝、帰
郷することができた。⁽⁰⁵⁾

(註12) 賢治の遺言は、つぎのとおりであった。

「合掌、私の全生涯の仕事はこの経をあなたのお
手許に届け、そしてその中にある仏意にふれて、あ
なたが無上道に入られんことをお願いする外あり
ません」⁽⁰⁴⁾

(註13) この後、賢治の手帳のなかに、つぎの言葉が記
されている。

「南無無辺行菩薩
南無上行菩薩
南無多宝如来
南無妙法蓮華経
南無釈迦牟尼仏
南無浄行菩薩
南無安立行菩薩」⁽⁰⁶⁾

引用文献

- (01) 燃ゆる信仰から精進の一路へ。(1921.3.6). 岩手
日報, 5:3-5.
- (02) 宮沢清六。(1991.12.4). 兄のトランク. 筑摩書
房.
- (03) 宮澤賢治。(1990.12.20). 銀河鉄道の夜. 集英社.
- (04) 山内修 編著。(1989.9.18). 年表作家読本 宮沢
賢治. 河出書房新社.
- (05) 竹内清乃 編集。(2014.5.21). 宮沢賢治 おれは
ひとりの修羅なのだ. 平凡社. 別冊太陽 日本の
こころ 218.
- (06) 宮澤賢治。(1997.7.30). 新校本 宮澤賢治全集

- 第十三卷(上) 覚書・手帳 本文編. 筑摩書房.
(07) 山下聖美. (2008.9.20). 宮沢賢治のちから. 新潮社.
(08) 吉本隆明, 天沢退二郎, 山折哲雄, 他. (2010.6.10). 宮沢賢治を旅する. 小学館. サライ7月号, 22(7): 18-83.
(09) 岩田シゲ, 他. (2017.12.20). 屋根の上が好きなお兄と私. 蒼丘書林.
(10) 堀尾青史. (1991.1.25). 年譜 宮澤賢治伝. 中央公論社.
(11) 賢治と文学. (2019.1.18). 花巻市役所. 花巻市役所ホームページ.
(https://www.city.hanamaki.iwate.jp/miyazawa-kenji/about_kenji/1003947.html). (2019.12.28 取得).
(12) 北川前肇. (2016.4.1). 日蓮聖人からの手紙 後世をこそ思ひさだむべき. NHK 出版.

参考文献(※引用文献を除く)

- 宮沢賢治. (1996.5.25). 銀河鉄道の夜. 角川書店.
宮沢賢治 著/天沢退二郎 編. (1991.7.30). 宮沢賢治詩集. 新潮社.
天沢退二郎 編. (2001.4.1). 宮沢賢治万華鏡. 新潮社.
天沢退二郎 編. (1996.6.25). 宮沢賢治ハンドブック. 新書館.
天沢退二郎. (1986.9.30). 《宮沢賢治》鑑. 筑摩書房.
天沢退二郎. (2009.7.25). 《宮沢賢治》のさらなる彼方を求めて. 筑摩書房.
天沢退二郎・中村稔 他. (1973.12.1). 國文學 解釋と鑑賞 宮沢賢治の世界. 至文堂.
天沢退二郎・栗原敦・杉浦静 編. (2011.5.10). 図説 宮沢賢治. 筑摩書房.
栗原敦. (2005.10.1). 宮沢賢治. NHK 出版.
伊藤信吉・伊藤整・井上靖・山本健吉 編. (1968.3.5). 日本の詩歌 18 宮沢賢治. 中央公論社.
上田哲 他. (1996.3.25). 図説 宮沢賢治. 河出書房新社.
今野勉. (2017.2.25). 宮沢賢治の真実. 新潮社.
山下聖美. (2017.3.1). 宮沢賢治スペシャル. NHK 出版.
堀尾青史. (1991.1.25). 年譜 宮澤賢治伝. 中央公論社.
見田宗介. (2001.6.15). 宮沢賢治 存在の祭りの中へ. 岩波書店.
井上ひさし. (2002.12.10). 宮澤賢治に聞く. 文藝春秋
小柳学. (2004.11.25). 宮沢賢治が面白いほどわかる本. 中経出版.
栗谷川虹. (1997.1.25). 宮沢賢治 異界を見た人. 角川書店.
桜田満 他 編. (1974.8.30). 現代日本文学アルバム 第10巻 宮澤賢治. 学習研究社.
菅原千恵子. (1997.11.25). 宮沢賢治の青春. 角川書店.
江宮隆之. (2008.2.19). 二人の銀河鉄道 嘉内と賢治. 河出書房新社.
佐々木賢二. (2011.5.30). 宮澤賢治『銀河鉄道の夜』の真実を探って. 誠文堂新光社.
門井慶喜. (2017.9.12). 銀河鉄道の父. 講談社.
原子修. (1993.4.15). 宮澤賢治論—銀河のいざない—. 土曜美術社出版販売.
丹治昭. (1996.10.15). 宗教詩人 宮沢賢治. 中央公論社.
西田良子 編. (1992.2.1). 宮沢賢治を読む. 創元社.
金子民雄. (1984.9.1). みちのくのメルヘン 宮沢賢治イーハトヴの世界. そしえて.
萩野貞樹 監修. (2006.11.24). 宮沢賢治. リヨン社.
田口昭典. (2006.9.21). 宮沢賢治と法華経について. でくのぼう出版.
大島宏之 編集. (1992.2.25). 宮沢賢治の宗教世界. 溪水社.
坂本幸男・岩本裕 訳注. (1991.6.26). 法華経(上)(中)(下). 岩波書店.
植木雅俊. (2015.3.24). サンスクリット原典現代語訳 法華経(上)(中). 岩波書店.
植木雅俊. (2018.4.1). NHK テキスト法華経. NHK 出版.
植木雅俊. (2011.10.25). 仏教, 本当の教え. 中央公論新社.
橋爪大三郎・植木雅俊. (2015.10.10). ほんとうの法華経. 筑摩書房.
紀野一義・梅原猛. (1969.9.10). 仏教の思想 12 永遠のいのち〈日蓮〉. 角川書店.
紀野一義. (1982.6.20). 「法華経」を読む. 講談社.
紀野一義. (1983.3.25). 名僧列伝(三) 念仏者と唱題者1. 角川書店.
紀野一義 他. (1980.6.1). 8人の祖師たち. 水書房.
松原泰道. (1983.7.5). 法華経入門. 祥伝社.
佐々木閑. (2017.4.5). 集中講義 大乘仏教 こうしてブツダの教えは変容した. NHK 出版.
久保田正文. (1967.12.16). 日蓮 その思想と生涯. 講談社.
中尾亮. (2001.11.1). 日蓮. 吉川弘文館.

庵谷行亨. (2003.12.31). 知っておきたい日蓮宗. 日本
文芸社.
ひろさちや. (2001.5.10). 日蓮がわかる本. 主婦と生
活社.
田村芳朗. (1975.10.1). 日蓮 殉教の如来使. 日本放
送出版協会.
浜島典彦 監修. (2016.5.26). 日蓮を読み解く 80 章.
ダイヤモンド社.

渡辺宝陽. (2011.6.10). 知識ゼロからの日蓮入門. 幻
冬舎.
本田不二雄 他 編集. (1993.2.15). 日蓮の本 末法
の世を撃つ法華経の予言. 学研.
末木文美士. (2010.4.10). 増補 日蓮入門 現世を撃
つ思想. 筑摩書房.
山岡莊八. (1979.4.15). 日蓮. 講談社.

Miyazawa Kenji and Nichiren Shōnin (The Sage Nichiren)

ENDO Hitoshi

Abstract

Nichiren Shōnin was born on 27 January, 1222, in the village of Kominato. He declared that only the Lotus Sutra contains the highest truths of Buddhism.

Kenji Miyazawa (27 August 1896 – 21 September 1933) was a Japanese novelist and poet. He was deeply worshiping the Lotus Sutra and Nichiren Buddhism eagerly, and joined the Kokuchūkai, a Nichiren Buddhist organization.

On the other hand, his father worshiped Jodo Shinshu, founded by Shinran Shonin (Saint Shinran). This caused a severe religious conflict between Kenji and his father. As a result, Kenji suddenly left home and went to Tokyo. At that time, Kenji was encouraged by one of the leaders of the Kokuchūkai to express the idea of the Lotus Sutra in literature. This is a leading manuscript for recitation written for an event held in Fukuoka Prefecture to commemorate 800th birthday.

This is a reading manuscript written for a big event held in Fukuoka Prefecture in commemoration of the 800th anniversary of Nichiren Shōnin's birth.